

## 共同研究プロジェクト紹介 日本語変種とクレオール の形成過程 宜蘭クレオール

著者	真田 信治, 簡 月真
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	3
号	1
ページ	38-48
発行年	2012-07
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000701">http://doi.org/10.15084/00000701</a>

## 宜蘭クレオール

Japanese-lexicon Creole in Taiwan

真田 信治 (SANADA Shinji), 簡 月真 (CHIEN Yuehchen)

### 1. はじめに

日本の植民地統治とともに台湾に持ち込まれた日本語(標準語および地域方言・社会方言)は、100年以上の長きにわたって現地諸語と接触しながら生き続けてきたわけであるが、その接触によって生じた言語現象には、次の3タイプがある(簡2011)。

- ① 現地語と日本語とのバイリンガルの発生(日本語を話す現在の高年層)
- ② 現地語の中への日本語要素の借用
- ③ 現地語と日本語の接触による新しい言語の形成

このうちの③は、日本語とアタヤル語の接触によるものであり、台湾東部、宜蘭県大同郷と南澳郷の一部の村に住むアタヤル人とセデック人によって用いられている。が、その存在も使用実態もほとんど知られていなかった。

本プロジェクトリーダーの真田と共同研究者の簡月真は、2007年に学界にこの新言語の存在を初めて報告し、その後、この言語を「宜蘭クレオール(Yilan Creole)」とネーミングして調査研究を進め、いくつかの報告をしてきた(真田・簡2007, 2008a, 2008b, 2009, Chien and Sanada 2010, 簡・真田2010, 2011)。

本稿では、宜蘭クレオールがまさに「クレオール」であることの検証を旨に、その形成の歴史的・社会的背景、および言語的実態に関する近年の研究成果を総括する。

### 2. 宜蘭クレオールの分布、名称

宜蘭クレオールは、宜蘭県の大同郷寒溪村と南澳郷東岳村・金洋村(の博愛路)・澳花村で主に使われている(図1)。

この言語に対して、地元ではさまざまな呼称が存在する。例えば、

寒溪村：kangke no ke, kangke no hanasi, nihongo, 寒溪泰雅語

東岳村：tang-ow no ke, tang-ow no hanasi, nihongo, 地方語言

金洋村：kinus no hanasi, nihongo, 博愛路的話

澳花村：zibun no hanasi, nihongo, 日本土話

のごとくである。一般には、アタヤル語よりはどちらかといえば日本語だと捉えている人が多い。ただし、例えば1936年生まれの、地元の教員経験者の男性のように、「これはわれわれの母語ではあるが、日本語そのものではない。われわれの母語と正式な日本語とはまった

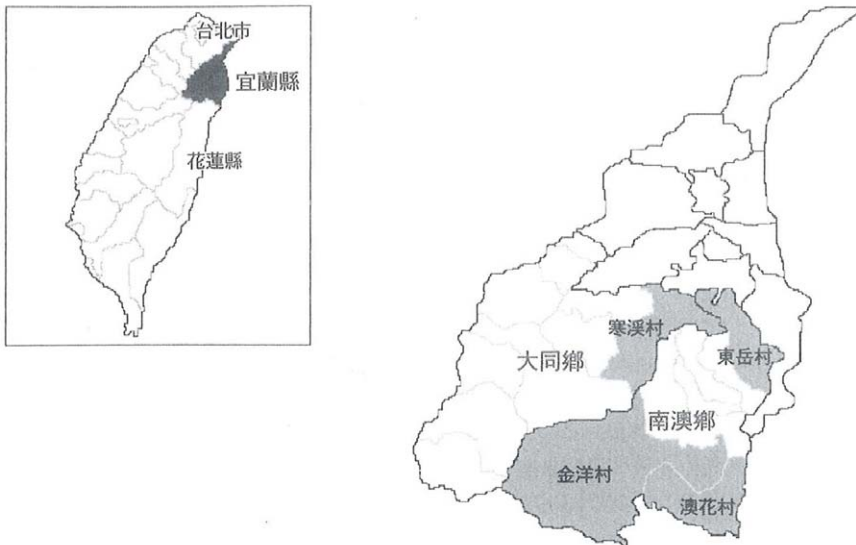


図 1 宜蘭クレオールの分布

く別のものである」と述べて、日本語と生活語としての宜蘭クレオールとの違いを明確に認識している人もいる。

なお、台湾では、原住民族語の復興をはかる政策の一環として、2007年から「原住民學生升學優待取得文化及語言能力證明考試」に合格した者に高校や大学入学試験の点数が35%プラスされるという政策が打ち出された。この検定試験では当初宜蘭県でのこの言語変種は含まれていなかったが、2006年の春に大同郷寒溪村の住民が積極的に自分たちの言語権を主張した結果、この言語変種がアタヤル語（泰雅語）の一方言（「寒溪泰雅語」）として、「行政院原住民族委員会」で認められ、検定試験に加えられることになった。ただし、その後、①寒溪村内部でのコンセンサスができていない、②寒溪村以外の3村の実態があまり配慮されていない、③この言語はアタヤル語ではないので試験からは外すべきだという声が出ている、などの問題に直面し、2009年7月22日に寒溪アタヤル語の位置づけに関する会議が開催され、検討の結果、2011年度から検定試験から外されることになった。

ところで、われわれは最初この言語変種を、「日本語を上層言語（superstrate language）として形成されたクレオール」という意味合いで、「日本語クレオール」と称して報告してきたのだが、これを台湾での高年層におけるリングフランカとして使われている日本語（「台湾日本語」）そのものを対象にした研究と誤認したり、在日コリアンの日本語や沖縄でのウチナーヤマトグチなどのバイリンガル・ミックスコードと同質のものともみなすような受け取り方が存在する状況をやや危惧もしている。「クレオール」と認定する以上、われわれはこれを独自の言語と捉えているわけである。実際、伝統的アタヤル語を母語とする話者も日

本語を母語とする話者も、この言語を聞いてほとんど理解することができない<sup>1</sup>。そのように、体系が極度に再編成されているのである。そこで、われわれはこれを地域にちなんで「宜蘭クレオール」とネーミングしたわけである。ちなみに、台湾言語の研究者たちもこの言語を「クレオール」と認定している（土田 2008, 大谷・黄 2009）。

### 3. 宜蘭クレオール運用の社会的状況

この地における言語運用には地域差や個人差が存在してはいるが、その傾向について、東岳村の場合を例にとると、表1のようになる。

表1 東岳村における言語運用の概況

生年			
1930s~1940	1940s~1950	1950s~1970s	1980年以降
(アタヤル語/セデック語) (日本語) 宜蘭クレオール	宜蘭クレオール (中国語)	宜蘭クレオール 中国語	(宜蘭クレオール) 中国語

( ) は全体的に該当言語がほかの言語ほど使われていないことを示す。

1940年以前に生まれた人の中には、日本語が話せる人が多く、この世代はまた宜蘭クレオールも流暢に操っている。ただし、エスニックグループ言語としてのアタヤル語、およびセデック語が話せない人が多い。例えば、1936年生まれの男性は、幼い頃から両親とは「日本語」で話してきたためにアタヤル語はほとんど話せないと言う。また、親の話した「日本語」は学校で習った「日本語」とは異なってアタヤル語の要素が混じっていたとも内省している。この1936年生まれの男性の親世代（1910年代~1920年代生まれと推定）が使っていた「日本語」は現在の宜蘭クレオール形成直前の段階の接触言語（contact language）なのではないかと考える。

1940年代~1950年、また1950年代~1970年代生まれの多くは、幼い頃から宜蘭クレオー

<sup>1</sup> 宜蘭クレオールによる会話の一斑を掲げる。話者は、高年層A・B（男性1931年生まれ・女性1933年生まれ）と高校生C（男性1995年生まれ）である。なお、表記は台湾行政院原住民族委員会と教育部が2005年12月に公布した原住民族言語表記法に従う。

C: akong, anta raran no...anta raran ga nani no tiyaw sigototeru

(おじいちゃん、あなた、昔の、あなた、昔は何のお仕事をしたの?)

B: yama ha (山だよ。)

A: raran yama ano (昔、山、あの。)

B: minna onci umah umah ha raran

(みんな、私たち、除草、除草、え、昔)

C: nani uyeteru? (何を植えてた?)

B: ima ga nay mo (今はない、もう。)

C: raran ga nani no mono (昔は何を。)

B: musa ta umah ngahi! utux mabi mita aw

(行く、私たち、除草、薩摩芋よ! 1つ、寝る、見るよ(薩摩芋畑の番をする。))

C: ngahi (薩摩芋。)

ルを使ってきたと言う。例えば、東岳村生え抜きの1947年生まれの女性は、幼い頃から両親（1924年生まれ・1925年生まれ）と宜蘭クレオールを使ってきたし、子供たち（1960年代～1970年代生まれ）とも宜蘭クレオールで話していると証言している。

1980年以降生まれの世代では、その多くは宜蘭クレオールが話せなくなり、中国語が主要言語となっている。台湾原住民族語の多くが消滅しつつあるのと同様、この宜蘭クレオールの話者も減少していることは確かである。

#### 4. 宜蘭クレオール形成の歴史的背景

クレオールを使用する4つの村の住民たちは、もともとは宜蘭県南澳郷の山奥にそれぞれ分かれて住んでいた人たちである。かつて山の中で狩猟採集を中心とした生活をしてきた。その後、日本植民地当局は、1910年代から宜蘭地域においても原住民族集団移住政策を推進した。山奥で暮らしていた人々を、支配しやすくするために、交通の便のいいところに集住させるという政策である。その過程で、同じ地区にありながらも個別に生活していたアタヤル人とセデック人が新たな集落にまとめられたのである。

アタヤル語とセデック語は、いずれもアタヤル語群に属してはいるが、互いの間ではほとんど通じ合わないくらいに異なっている（李1996）。東岳村の場合、住民が現在の地に移り住んで共同生活を始めたのは1913年からのことであるが、その2年後の1915年に「教育所」が設置され、この地で日本語教育が始まった。お互いに通じ合わない言語を使用するアタヤル人とセデック人が、コミュニケーションをとるために、その「教育所」で、あるいは日本人との接触のなかで身に付けた簡略な日本語を、互いのリングフランカ（共通言語）として使い始めたのではないかと推測される。しかし、日本語がまだ完全に普及していなかったため、アタヤル語とセデック語の要素が混じったハイブリッドな言語が形成された<sup>2</sup>。

そして、その言語を第一言語とする世代が生まれ、その後、それが継承されるなかで体系を再編成しつつ発展したのである。その発展の最大の要因は、日本の敗戦によって日本人が撤退し、日本語母語話者による影響が途切れたことに求められる。もし日本語が被さったままであったなら、いったん形成されたクレオールも脱クレオール化で日本語に合流したことであろう。標準的日本語との関係が途切れ、その上に中国語が被さってきた結果、クレオールはパック状態で維持され、単純化や合理化などの再編成が行われたのである。一方ではクレオールが中国語に干渉されて変形する傾向も認められる。この地域は、まさにクレオールの進行中のプロセスを眼前において示してくれているのである。

<sup>2</sup> この地域において、アタヤル語とセデック語は長きにわたって接触してきたのであるが、その接触の結果、次のような2つの言語変化が生じたと考えられる。1つは、セデック語のアタヤル語への言語シフト（language shift）。もう1つはリングフランカとしての「宜蘭クレオール」の誕生（language creation）である。セデック語がアタヤル語に言語シフトした現象については、次のような貴重な記録が残っている。「リヨヘン社のTausaはこの蕃社の大多数を占むるに拘らず、著しくMebealaの影響を蒙り、日常語には固有語を使用せずMebeala語を用ひている状態である」（移川ほか1935）。Mebealaはアタヤル語C'uli方言であるが、この記述から、リヨヘンという社において、セデック語がアタヤル語にシフトしたことが分かる。ほかの「社」でも似たような状況が観察されたのかどうかについてはさらなる追究が必要であるが、1910年代に形成された集落（現在の寒溪村・東岳村・金洋村・澳花村）では、新しい言語を誕生させる、という異なったタイプの変化を生じさせることになったわけである。

## 5. 宜蘭クレオールの言語的特徴

まず、ジャンルごとに、その言語的特徴を要説する。

### 5.1 音韻

宜蘭クレオールにおける子音音素と母音音素は、次のとおりである。

〈子音〉 /p, t, d, k, ' , c, b, s, z, x, g, h, m, n, ng, l, r, w, y/で、  
そのうち、/ , c, b, g, ng/ はそれぞれ [ʔ, ts, β, γ, ŋ] である。

〈母音〉 /i, e, a, o, u/

子音については、伝統的なアタヤル語 C'uli' 方言と同様に、口蓋垂破裂音の [q] を持っていない。ただし、C'uli' 方言にはない歯茎破裂音の [d] を持っている。/d/は *denki* ‘電灯’や *denwa* ‘電話’など日本語を起源とする語彙にしか観察されていない。したがって、この /d/の存在は日本語の影響と判断できる。母音も、アタヤル語 C'uli' 方言と同様、/i, e, a, o, u/である。なお、/u/は円唇音でアタヤル語と同じである。

アクセントは非弁別的で、最後の音節に置かれる。これはアタヤル語のアクセントと同様である。

### 5.2 語彙

ここでは基礎語彙<sup>3</sup>について、東岳村生え抜きの1964年生まれの男性を対象とした結果を示す。ちなみに、この男性は日本語がまったく話せない。宜蘭クレオールを第一言語として育ち、宜蘭クレオールと中国語とのバイリンガルの言語生活を送っている。

日本語起源の語：約65%

アタヤル語起源の語<sup>4</sup>：約25%

中国語・閩南語起源の語：約10%

ここからは、日本語が語彙供給言語 (lexifier language) であることが分かるのである。

なお、日本語に関しては、*taru* (足る), *oru* (おる), *taku* (煮る) など、西日本方言の語形が多く使用されていることが特筆される。

### 5.3 語順

アタヤル語の語順はVOSであるが、宜蘭クレオールは日本語と同様にSOVが基本である。ただし、アタヤル語的なVOS構文も特に話しことばにおいて現れることがある。次のようである。

(1) *taberu mo gohang anta* (あなた、ご飯食べた?)

<sup>3</sup> 基礎語彙とは、日常生活の大部分をまかなうことのできる語彙と考える。調査では、峰岸(2000)の「言語調査票」を用いた。

<sup>4</sup> 1930年代における南澳地域の人口比率は、アタヤル人85.7%、セデック人14.3%である。宜蘭クレオールにセデック語の影響が少ないのは、このようにセデック人がマイノリティであったことが関与していると考えられる(簡・真田2011)。

また、SVO 構文も一部に散見する。次のようである。

- (2) anta waku are icu ngasal kuru no (あなたは彼がいつ家に来るか分かる?)
- (3) wasi ski are ni (私は彼が好き!)

これらは、クレオールとしての普遍的な語順が現出したものなのか、あるいは中国語定型表現の干渉があるのか。その検討が今後の課題である。

#### 5.4 格標示

世界のクレオールの多くは格標示がなされない。宜蘭クレオールもゼロ格もしくは格の省略が見られるが、主格 ga, 与格 ni, 具格 de, 共格 to, 奪格 kara, 属格 no などの使用も観察される。なお、アタヤル語とセデック語は前置詞標示であるが、宜蘭クレオールは基本的に日本語と同じく後置詞標示である。

### 6. 言語体系の再編成

以下、言語体系の再編成について、東岳村での事例から掲げる。

#### 6.1 語彙の置き換え《haku》

haku という語であるが、「服を着る」「ズボンを穿く」「靴を履く」「帽子をかぶる」「時計をつける」「指輪をはめる」などの動詞部分がすべて haku で表現される。これは伝統的なアタヤル語の posa という語を日本語由来の haku に置き換えたものである。なお、「(女性用の)ズボン」が「mongpey (モンペ)」に対応していることが興味深い。

表 2 haku

宜蘭クレオール	日本語	アタヤル語
lukus haku	服を着る	posa lukus
mongpey haku	ズボンを穿く	posa mongpey
kucyu haku	靴を履く	posa kucyu
bosi haku	帽子をかぶる	posa bosi
tokey haku	時計をつける	posa tokey
king haku	指輪をはめる	posa king

#### 6.2 意味の変化《otoko》

otoko という語が、「男」であり、「夫」であり、かつ「オス」の意味にもなっている。アタヤル語の ti-ngan (家畜類の雄) も tohok (野生類の雄) もすべて otoko に収斂しているの

である。これは onna の場合についても同様である。

表 3 otoko

宜蘭クレオール	日本語	アタヤル語
otoko	男	likuy
otoko	夫	likuy
otoko no hoying	雄犬	likuy hoying
otoko no welung	雄鶏	ti-ngan welung
otoko no biyak	雄の猪	tohok biyak

### 6.3 体系の簡略化《人称代名詞》

人称代名詞について。それぞれの人称の単数形と複数形は下記のとおりである。

表 4 人称代名詞

一人称		二人称		三人称	
単数	複数	単数	複数	単数	複数
wasi	wasitaci wataci waci	anta nta	antataci ntataci	are	aretaci ataci

一人称、二人称、三人称、いずれの複数形にも-taci が使われている。-taci は人称代名詞の複数形を表す接辞である。なお、ここには、日本語のような、上下関係や性、スタイルなどによる分化は認められない。日本語の複雑な敬語やスタイルを究極的にスリム化した形で再編成がなされているのである。ちなみに、アタヤル語の人称代名詞は文法格によって語形を異にするのであるが、その性質もここには認められない。

ところで、村によってバリエーションが存在する。一人称代名詞の場合を例にとれば、寒溪村に waha と wa、金洋村に usi といったバリエーションが観察される。

### 6.4 形態の統一《-suru》

suru が動詞化の接辞として生産的に用いられる。suru に前接できるのは名詞と形容詞類、動詞である。例えば、次のようなものである。

- kusisuru (櫛+する→梳かす)
- tiyowsuru (仕事+する→働く)
- bakasuru (ばか+する→からかう)



kiluxsuru (熱い+する→温まる)

yasumusuru (休む+する→休む)

ucusuru (撃つ+する→撃つ)

yasumusuru や ucusuru のような「動詞 + suru」の使い方は中・若年層に見られるものであるが、この形式に関して、高年層の人々は、「この頃の若い者のことばは少し乱れている」として、「例えば、yasumu とかわずに yasumusuru と、変なことばづかいをする」と批判する。すなわち、suru の付加は新しい形式 (innovation) と認められるのである。若い世代では suru が動詞を表すマーカーとなりつつある。

日本語が身近であった高年層の人々には許されないことであっても、日本語に馴染みのない若い人たちは、自分の使いやすいようにことばを合理的に変容させて新しい体系を作り出しつつあるわけである。

## 6.5 名詞文の否定形式

文法に関しても再編成が行われている。ここでは、その 1 例を挙げよう。例えば、名詞文の否定形式については、次のような使用が観察される。

(4) wasi sensey cigo. (私は先生じゃない。)

(5) seto cigo no ninggen, maye koy. (生徒じゃない人、前に来なさい。)

すなわち、名詞文の否定には、日本語のような形態的な処理を要する形式「じゃない」などが採用されず、語彙的な否定形式の cigo が用いられるのである。この cigo は、日本語の「違う」に由来する形式である。このような、名詞に「違う」を後接させて否定を表す用法は、台湾高年層の用いる、いわゆる「台湾日本語」にも観察されるところである (簡 2011)。

過去テンスは、次のようになる。

(6) are lela ga sensey cigo. (彼は先生じゃなかった。)

(7) aci lela gago cigo. (あそこは学校じゃなかった。)

ここで注目されるのは、過去テンスが時間副詞 lela (「かつて」の意) で語彙的に表されているという点である。このような用い方は宜蘭地域で使われているアタヤル語 C'uli' 方言の影響なのではないかと考えられる。アタヤル語 C'uli' 方言では、上の用例 (6) に対して、(8) のように表現する (インフォーマントは 1954 年生まれの男性である)。

(8) lela                      ga                      iyat                      sensi                      hiya.  
 かつて   トピックマーカー   否定詞   先生   三人称代名詞  
 (彼は先生じゃなかった。)

(6) と (8) を対照すると、宜蘭クレオールでは、アタヤル語 C'uli' 方言と同様に lela という時間副詞を用いて過去テンスが表されていることが分かる。宜蘭地域のアタヤル語と宜蘭アタヤル語の間には明らかな連続性が認められるのである (Chien and Sanada 2010)。

## 7. おわりに

以上、宜蘭クレオールがまさに「クレオール」であることを検証し、その運用の社会的状況、形成の歴史的背景、および言語的実態についての今までの研究をまとめてみた。

宜蘭クレオールにとっては、アタヤル語が基層言語であり、日本語が上層言語（語彙供給言語）である。そして、現在は中国語が傍層言語となっているのである。

言語接触の結果として生まれたクレオールをめぐる研究は、言語の変化や言語の普遍性など言語の本質を探究する上で貴重な材料を提供してきた。ただし、これまでの研究事例では、主に欧米諸語を基盤としたクレオールが取り上げられるのが一般であった。環太平洋地域のクレオールについて論じている Ehrhart and Mühlhäusler (2007) においても、台湾での状況については触れられていないのである。これまでの研究で取り扱われた言語の類型・系統とは異なる、このアタヤル語と日本語の接触による宜蘭クレオールの解明は斯界に貴重な研究事例を提供するものとなろう。

### ●付記●

本稿は、真田による「国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 JLVC2012」(2012.3.20) における発表内容をベースに、簡（プロジェクト共同研究者）との最新の研究成果を加筆して作成したものである。

### ●参考文献●

- Chien, Yuchchen and Shinji Sanada (2010) Yilan Creole in Taiwan. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 25(2): 350–357.
- 簡月真 (2011) 『台湾に渡った日本語の現在—リンガフランカとしての姿—』東京：明治書院。
- 簡月真・真田信治 (2010) 「東台湾泰雅族の宜蘭克里奧爾」『台湾原住民族研究季刊』3(3): 75–89.
- 簡月真・真田信治 (2011) 「台湾の宜蘭クレオールにおける否定辞—『ナイ』と『ン』の変容をめぐって」『言語研究』140: 73–87.
- Ehrhart, Sabine and Peter Mühlhäusler (2007) Pidgins and Creoles in the Pacific. In: Osahito Miyaoka, Osamu Sakiyama and Michael E. Krauss (eds.) *The vanishing languages of the Pacific Rim*, 118–143. Oxford: Oxford University Press.
- 李壬癸 (1996) 『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭：宜蘭縣政府。
- 峰岸真琴 (2000) 『言語調査票 2000 年版』文部科学省特定領域研究「環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究」総括班成果物 ([http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki\\_gen/query/aaquery-1.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm)) (2009/7/15 アクセス)。
- 大谷由紀・黄美金 (2009) Japanese impact on Han-xi Creole—A phonological perspective, 『全國語言學第十屆研討會』ポスター発表 11 月 27–28 日於台湾・元智大学。
- 真田信治・簡月真 (2007) 「台湾アタヤル族における日本語クレオール」『日本語学会 2007 年度春季大会予稿集』167–174.
- 真田信治・簡月真 (2008a) 「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』4(2): 69–76.

真田信治・簡月真(2008b)「台湾の日本語クレオール」『言語』37(6):94-99.

真田信治・簡月真(2009)「再び台湾—日本語ベースのクレオール」真田信治(著)『越境した日本語—話者の「語り」から—』98-116. 大阪:和泉書院.

土田滋(2008)「日本語ベースのクリオール—アタヤル語寒溪方言」『台湾原住民研究』12:159-72.

移川子之蔵・宮本延人・馬淵東一(1935)『臺灣高砂族系統所屬の研究』東京:刀江書院.

《要旨》 アジア・太平洋の各地においては、戦前・戦中に持ち込まれた日本語が、長きにわたって現地諸語との接触を保ちながら使われ続けてきた。その接触によって最も大きな変化を遂げたのは、台湾東部の宜蘭県に住むアタヤル人とセデック人が用いている、日本語を語彙供給言語とするクレオール（「宜蘭クレオール」）である。本論文では、われわれの共同研究プロジェクト「日本語変種とクレオールの形成過程」の一環として、この「宜蘭クレオール」に焦点を当て、これがまさに「クレオール」であることを、その形成の歴史的・社会的背景から検証し、その言語的特徴に関する近年の研究成果を総括する。

**Abstract:** As a result of Japan's wartime occupation, language contact between the Japanese language and local languages in the Pacific Rim has occurred over the course of a number of years and, consequently, is responsible for various types of language change in this area. In Taiwan, for example, contact between Atayal and Japanese has produced a little known language variety spoken by indigenous residents living in Yilan County in Eastern Taiwan. We have named this variety 'Yilan Creole'. As a part of an interim report on our research, the present paper attempts to clarify the socio-historical background and the linguistic nature of 'Yilan Creole'. We hope these attempts will serve as a basis for establishing the validity of our claim that this new language variety is in fact a creole.

## 真田 信治 (さなだ・しんじ)

奈良大学文学部教授。文学博士（大阪大学）。大阪大学大学院教授を経て、2009年4月より現職。

2009年10月より国立国語研究所時空間変異研究系客員教授。

主な著書・論文：『越境した日本語—話者の「語り」から—』（和泉書院，2009），『県別 罵詈雑言辞典』（共編，東京堂出版，2011），『方言学』（編，朝倉書店，2011）。

受賞：第18回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会，1990），第8回とやま賞（富山県置県百年記念財団，1991）。

社会活動：博報財団日本語海外研究者招聘事業審査委員長，新村出記念財団監事，日本方言研究会世話人。

## 簡 月真 (かん・げっしん)

国立東華大学原住民族学院副教授。博士（文学・大阪大学）。

主な著書・論文：『改訂版社会言語学図集—日本語・中国語・英語解説—』（共編，秋山書店，2010），『台湾に渡った日本語の現在—リンガフランクとしての姿—』（明治書院，2011）。

受賞：第3回徳川宗賢賞（社会言語科学会，2003），第24回新村出記念財団研究助成金（現称：奨励賞，新村出記念財団，2006）。

**基幹型共同研究プロジェクト「日本語変種とクレオール形成過程」**

プロジェクトリーダー 真田信治 (奈良大学 文学部 教授 / 国立国語研究所 時空間変異研究系 客員教授)

**プロジェクトの概要**

アジア・太平洋の各地には、戦前・戦中に日本語を習得し、現在もその日本語能力を維持する人々が数多く存在する。特に台湾やミクロネシアなどでは、母語を異にする人々の間でのリンガフランカとして用いられ続けている。また、台湾宜蘭県の一部には、日本語を上層とするクレオールが形成されている。本プロジェクトでは、これらの地域（台湾・パラオ・マリアナ諸島・サハリン・中国東北部など）を対象としたフィールドワークによって、現地での日本語変種、およびクレオールの記述・記録を行い、海外における日本語を交えた異言語接触による言語変種の形成過程、ならびにそこに介在した社会的な背景を究明する。